

原瑠璃彦
1988年生まれ。静岡大学専任講師。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。日本の庭園、能・狂言をキーワードに分野横断的な研究をおこなう。主な業績に共著『Promise Park』(workroom press、2017)、『中世に架ける橋』(森話社、2020)、共編著『翁の本』シリーズ(凸版印刷株式会社、2020-21)等。

KARAPPO Inc.
企業や各種プロジェクトのブランディングや、コンサルティング、デザイン、実装を行う会社。アートプロジェクトにも積極的に関わっており、YCAMとのプロジェクトには『森のDNA図鑑』ウェブサイトのデザイン・開発や、『YCAM InterLab Camp vol.3 パーソナル・バイオテクノロジー』のグラフィックデザイン及びアーカイブサイト制作がある。

ALTEMY
津川恵理(代表)と戸村陽(デジタルデザインパートナー)による建築的
設計集団。建築から駅前広場まで様々な設計を手掛ける。建築と移り変わる環境の間で、知覚の切り口となる“像”を創造し、都市スケールにまで広がる身体性を伴った建築をつくる。建築を通して、人の感性と社会が結びつき、社会的な文化が生まれていくことを目指している。

白木良
1990年岐阜県生まれ。京都工芸繊維大学造形工学課程卒業。現代美術、メディアアートの分野で活動。コンピュータプログラミングを用いた作品の制作を行う。Dumb Type、高谷史郎、池田亮司、名和晃平など多くのアーティストの作品にプロジェクトメンバーとして参加。

主催：山口市、公益財団法人山口市文化振興財団
後援：山口市教育委員会
助成：令和3年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業
共同開発：YCAM InterLab
企画制作：山口情報芸術センター [YCAM]

*本展示の一部は、科学研究費 基盤研究(B)「日本庭園の総合的アーカイブの開発をめぐる研究」(2019-21年度、研究代表者：原瑠璃彦、課題番号：19H01225)による研究成果です。

庭園アーカイブ・プロジェクト：原瑠璃彦(静岡大学)、伊藤隆之(YCAM)、高原文江(YCAM)、津田和俊(YCAM、京都工芸繊維大学)、城一裕(YCAM、九州大学)

企画制作：菅沼聖(YCAM)、会田大也(YCAM)、原瑠璃彦(静岡大学)

ウェブデザイン・開発/グラフィック・デザイン：KARAPPO Inc.
空間デザイン：ALTEMY
プログラミング：白木良

3Dスキャン・点群編集：井上智博(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab)
常栄寺庭園 3Dスキャン 協力：石井栄一、西本文博
無鄰菴庭園 3Dスキャン 協力：孫夢(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab)
常栄寺庭園 サウンド・レコーディング 協力：中上淳二(YCAM InterLab)、石井栄一
サウンド・システム開発：安齋励應(東京藝術大学)、岡崎圭佑(慶應義塾大学)

映像データ整理：石井栄一
画像権利処理協力：木村英恵

謝辞：宗教法人 常栄寺、山口市文化財保護課、京都市、無鄰菴管理事務所、植彌加藤造園株式会社、宗教法人 龍源院

「Incomplete Niwa Archives 終らない庭のアーカイブ」展 関連オンラインイベント

2021年10月9日(土) 19:00~20:30

庭と山口情報芸術センター(YCAM)

——「INA」前史とその研究活動

登壇者：原瑠璃彦(静岡大学)、伊藤隆之(YCAM)、高原文江(YCAM)、城一裕(YCAM、九州大学)、津田和俊(YCAM、京都工芸繊維大学)、会田大也(YCAM)

2021年10月30日(土) 19:00~20:30

庭とウェブメディア・デザイン・アーカイブ

——「INA」ウェブサイトの開発

登壇者：三尾康明(KARAPPO Inc.)、寺田直和(KARAPPO Inc.)、原瑠璃彦ほか

2021年11月13日(土) 19:00~20:30

庭と空間・身体性・アーカイブ

——「INA」インスタレーション・ヴァージョンの制作プロセス

登壇者：津川恵理(ALTEMY)、戸村陽(ALTEMY)、白木良(プログラマー)、原瑠璃彦ほか

2021年12月11日(土) 17:00~18:30

日本庭園のアーカイブの歴史と未来

登壇者：栗野隆(東京農業大学)、エマニュエル・マレス(京都産業大学)、原瑠璃彦ほか

「INA」YouTubeチャンネル
※ アーカイブ配信あり



2022年1月には、映画「動いている庭」ほかの上映、トークイベントを予定しています。

詳細情報はYCAM、「Incomplete Niwa Archives 終らない庭のアーカイブ」ウェブサイトをご覧ください。

<https://www.ycam.jp/>

Incomplete Niwa Archives

終らない庭のアーカイブ

「庭園アーカイブ・プロジェクト」は、日本庭園研究者の原瑠璃彦(静岡大学)と、伊藤隆之(YCAM)、高原文江(YCAM)、津田和俊(YCAM、京都工芸繊維大学)、城一裕(YCAM、九州大学)による共同研究開発プロジェクトであり、2019年4月に発足しました。このプロジェクトでは、現代のテクノロジー、YCAMがこれまで様々な活動で培ってきたノウハウを駆使して、日本庭園の新しいアーカイブを研究開発しています。

2021年10月8日[金] —— 2022年1月30日[日]

山口情報芸術センター [YCAM] 2階 ギャラリー

終わらない庭のアーカイヴ

「Incomplete Niwa Archives 終わらない庭のアーカイヴ」とは

日本庭園は、石や水、土や植物、建築物によって構成されます。庭園は、いわゆる芸術作品や建築と異なり、つくられた時点が完成ではありません。庭園とは時間とともに変化してゆくものです。それゆえ、庭園には完成がありません。そうした変化し続ける庭園をアーカイヴ化することは原理的に不可能であり、その試みもまた永久に完成のないものとなります。

本プロジェクトは、現代のテクノロジー、YCAMがこれまで様々な活動で培ってきたノウハウを駆使し、日本庭園の新しいアーカイヴのプロトタイプを3年間で研究開発すべく活動をしてきました。そこで対象とした庭園は、山口市・常栄寺庭園（通称：雪舟庭）、京都市・無

鄰菴庭園、龍源院庭園の3つです。その3年間の研究成果をここに公開します。

「Incomplete Niwa Archives 終わらない庭のアーカイヴ」というタイトルは、庭自体が完成することなく動きつづけることから、そのアーカイヴもまた同様に完成がないことに基づいています。こうした矛盾した、あるいは不可能な営みによって、庭の本質を明らかにすることもまた、本プロジェクトのねらいです。

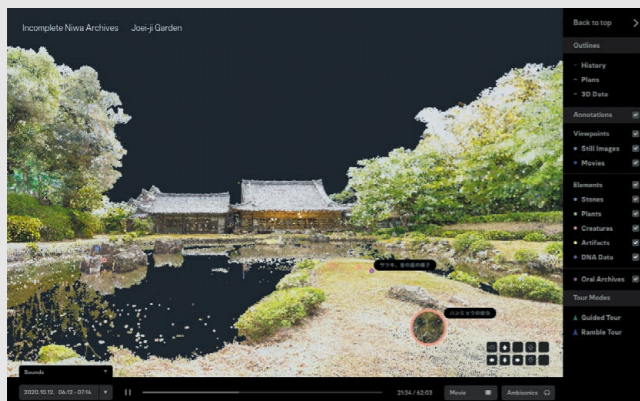
1. 常栄寺庭園（通称：雪舟庭） 15世紀後半頃 雪舟（伝）作庭
2. 無鄰菴庭園 明治27-29年 七代目・小川治兵衛（植治）作庭
3. 龍源院庭園 16世紀初め、昭和33・55年、鍋島岳生、細合鳴堂 作庭



「INA」ウェブサイト

—— 更新し続ける庭のアーカイヴ・ウェブサイト

本プロジェクトでは、上記の3つの庭園を対象として、3Dスキャン、映像・写真撮影、立体録音、石や植物、生物の調査のほか、水質や土壌のDNA解析、また、各専門家のインタビューを実施しました。こうした多様なデータを一つのUI（ユーザーインターフェース）にまとめあげた「INA」ウェブサイトを、様々なメディアを対象にデザインを手がけるKARAPPO Inc.とともに制作し、公開しています。



本展でも、このウェブサイトを開覧することができます。

ユーザーは、ブラウザ上で庭園の3Dデータを自由に操作しながら、各地点に埋め込まれているアノテーションを選ぶことで、上記のデータを一つ一つ参照することができます。また、ツアー・モードを選択すると、自動で庭園の様々な情報をめぐってゆくことができます。

これらのアノテーションは随時、更新してゆきます。

Incomplete Niwa Archives

—— 終わらない庭のアーカイヴ ウェブサイト

<https://special.ycam.jp/niwa/>



「INA」インストール・ヴァージョン

—— 庭のアーカイヴをぼんやりと体験する

本展示では、常栄寺庭園のアーカイヴ・データを素材とし、「INA」インストール・ヴァージョンを公開します。

ウェブサイト版では、ユーザーは任意の場所からブラウザ上で庭園のアーカイヴを参照するのに対して、本展示では、ユーザーの場所性、空間性、身体性を重視しています。そこで着目したのが、日本庭園における「眺める」という特異な行為です。

日本庭園は、五感全体で体験することのできる場所です。また、古来そこは、詩歌を詠み、音楽を奏で、舞を舞うなど、さまざまな活動が繰り広げられる場でもありました。しかし、そのようにさまざまな活動に用いられることができる一方で、庭園は、何となくぶらぶら歩き、ぼんやりと風景を眺め、また、音を聴いていることのできる場です。このように何事にも用いられない状態にもまた用いられることこそ、日本庭園の特徴ではないでしょうか。

日本庭園のアーカイヴを実空間に設置するにあたっては、そのアーカイヴそのものもまた「庭のように」ぼんやりと体験できることを目指しました。そこで、今回、空間デザインを、建築を軸に身体性を重視した斬新な分野横断的活動を行うALTEMYに委託しました。また、常栄寺庭園で取得した映像、音源を9面のモニターと4chのスピーカーから再生させるにあたり、そのシステムをプログラマーの白木良氏に新しく開発を依頼しました。

9面のモニターは日本庭園の石組を模しています。日本庭園の骨格をなす石組は、決して「見る」ことができません。一つの石を見ようとすると自ずとほかの石は見えなくなり、石組全体を見ようとすると、どうしても焦点はぼやけてしまいます。こうして、日本庭園は見られるのではなく、ぼんやりと眺められるようにつくられているのです。

本インストール・ヴァージョンは、こうした日本庭園の様々な特性を解体・再構築したものとなっています。



環境と化したメディアとパフォーマンス体験

津川恵理 (ALTEMY)

本展示では、日本庭園独自の体験を再構築することに挑んでいる。実際に日本庭園を訪れた際に感じられる庭園の特性を、編集・切り取り・読み替えの操作によって、新たな姿へと異化させている。庭園内を歩くと、身体のあるゆる箇所を通して、私たちは匂いや、音や、周囲の自然を感じる事ができる。また、庭園では何か見る対象が具体的に定まっているわけでもなく、無意識にそれを眺めているのだ。本展示では、人と庭園のそのような関係性を、別の形で再現することを試みた。

まず、YCAMの中でも象徴的な大階段に注目し、その上に鑑賞者の身体を委ねられる新たな造形を設計することを考えた。クッション性のある巨大なソファのような造形は、来館者が好きな場所を選び、好きな体勢で庭のアーカイヴを眺めることを可能にしている。また、天井からは複数のディスプレイが吊られており、それらは映像の対象というより、アーカイヴを体験する環境を生むものとして存在している。ここでは、鑑賞者とメディア（アーカイヴ）の関係性は限定されず、鑑賞者自身がその関係性を自由に選択できるのだ。「無意識に庭を眺める」という、庭園を訪れたときに得られる独特の感覚を、展示空間ならではの手法で再現している。

素材については、階段上の造形にウレタンフォームを使用している。既存の階段寸法を用い、その倍数のモジュールをもつウレタンフォームで構成することで、階段という地形を拡張しつつも、様々な鑑賞体験を展開し得るフォーマット性を獲得している。

この展示空間は、まるで日本庭園のように常に移り変わり、終わりのない状況を作り出している。ここで感じられる新たな庭園の魅力を、是非体験していただきたい。

